

【書評】

星村平和著『いまなぜ“新しい史観”か—世界史の窓から考える—』

(明治図書, 1997)1,250円

溝 上 泰

(鳴門教育大学)

今、まさに20世紀から21世紀への歴史的転換のさなかにある。しかし、われわれは日常生活上の出来事に目を奪われ、大きな歴史の流れに沿った見方をとかく失いがちになるものである。もっと自分自身の足元を見つめこれからの自分の在り方を探求しようという自覚が求められている。こうしたとき、人類や日本人の歩んできた道、わけでも、20世紀は一体どんな世紀であったかを振り返り、これからの21世紀をどう生きていけばよいかについてじっくりと考えたいものである。

本書はまさにこうした課題に対処する場合有益な示唆を与えてくれるであろう。著者星村平和氏は文部省教科調査官(世界史担当)から兵庫教育大学教授、国立教育研究所教科教育研究部長を経て現在帝京大学教授である。氏は専門とする社会科教育、世界史教育、国際理解教育を始めとし、学校教育に関するオピニオンリーダーとして活躍中である。

先ず、本書の構成を明らかにしてみよう。

- I いま、なぜ世界史か
- II 歴史への新しい「問い」
- III 一国中心の歴史を超える
- IV 「産業革命」はあったのか
- V EUの教科書にみる「自国史」の扱い
- VI 海からみた歴史
- VII 歴史授業ワールド化の視点
- VIII 西欧「近代」を考える
- IX 歴史にみる「病気」と「子ども」
- X 二十世紀の意味を問い直す

本書が基本的に主張しているところは、現代の国際化した状況の中でわれわれが直面する課題を解決するに当たっては、地球的、全人類の規模でとらえねばならないのであるが、そこで必要なこ

とは世界史に基礎をおいた歴史意識、歴史感覚を身につけることであるということである。

ところが、学ぶ側の世界史離れ現象とともに、教える側の安直な進歩史観や単線の発展段階論への固執という二重の障害が見られるという。これらを克服するため、歴史を創った先人の業績や英知はもちろんのこと歴史上の過ちを率直に反省し、これからの歴史を拓く主体者としての自覚をもたせるように歴史学習を改善することであるとする。本書の論拠はフランスのアナール学派のマルク・ブロックや第2世代のフェルナン・ブローデルの歴史観が示す衣食住などの日常性の重視を含め歴史の基底あるいは深層への着目にあるように思われる。

それとともに、現代の国際化・地球化の状況から世界史の観点から国民史を見直したり、産業革命に対する新しい見解を提起したりして、旧来の歴史観の枠組を解体して、新しい歴史創造のための発想の転換の必要を示唆している。

ヨーロッパでは既に欧州連合の成立に伴い、新しい地域共同体に対応した欧州共通教科書が作成されヨーロッパとしての意識や連帯感を養う努力が始まっている。それはヨーロッパとは何かというかれらの自問から出発し、自らの歴史的歩みを再整理し新しい解釈を生み出す営みである。

ひるがえってアジアにおける日本の場合はどうであろうか。本書の6章、7章は旧来の陸地史観に立った日本列島の歴史から海洋史観による海からみた歴史への転換を主張している。これは必然的にアジア全般の動きの中に日本の歴史を位置付けることとなり、ひいては世界的視座からの位置付けが可能となると思われる。現代、世紀の転換期に当たり、歴史の新たな問い直しが求められている。本書はこの課題に正しく応えている。